
BAR「憩い」

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

BAR「憩い」

【Nコード】

N5438C

【作者名】

【あらすじ】

大人の女とカクテルとバーテンダーで大人のストーリーに挑戦。でも結局コメディィー。

夜の街は眠らないまま暗い空に明かりを灯している。

ぶらぶらと呼び込みを無視して歩いていた和也は、細い路地の先に小さなバーがあるのを見つけた。

たまには新規開拓でもしてみるかな、ふとそんな事を考えた和也は足をその細い路地に向ける。

近くまで来ると、和也の目にも小さなバーの姿がはっきりと見えた。薄暗い中、白っぽい壁に黒く重そうなドア、その上にちかちかと点滅している「BAR憩い」の文字。

知る人ぞ知る秘密の場所のような雰囲気、和也は期待を込めながらドアを押した。

びくともしない。

今度は引いてみた。

びくともしない。

休みかと思っただが、中からはジャズっぽい音楽が流れている。和也はドアの周囲を注意して観察した。

下の方をよく見ると、レールのような物が見える。試しにドアを横にずらすと、からからと音を立てながらスムーズに開いた。

「引き戸……？」

思わず呟いてしまった和也の目に、店内の様子が入ってきた。

間接照明の薄暗い空間に、黒いカウンターが長く伸び、奥の方にはゆったりと座れそうなソファとテーブルがあった。

カウンターの向こうには、白いシャツの上に黒いベストと黒い蝶ネクタイを締めた、白髪の総髪で白いまゆ毛が目覆うほどに伸びているバーテンダーが、銀色のシェイカーをもったまま全身で細かく振動していた。

とりあえず和也は、カウンター席を眺める。奥の方に女性が一人グラスを傾けていた。

黒い髪をボブカットにした、憂いのある瞳が退廃的な雰囲気をかもし出す女性。

和也はその女性の隣の席に歩いて近づく。

「隣、いいかな」

「ええ」

女性はけだるげに和也を見上げると、ため息のような返事をした。和也は余裕を見せようとゆっくりと席に座り、全身力タカタ振動しているバーテンダーに向かって片手を上げた。

「マスター、スクリユードライバーを」

さらに和也は指をスナップさせた。

「こちらの方にも同じ物を」

女性はちらりと和也の方を見たあと、また視線を前方の虚空に戻した。

「ふふ、レディーキラーなんて……どういつつもりなのかしら？」

女性は和也の方を見ずに、艶のある声でささやくように言った。

「俺の気持ですよ」

和也の言葉に、一瞬だけ二人の視線が交差した。

その二人の前に、バーテンダーが熱い番茶が入った湯のみを置く。あと梅干に砂糖がかかったのがでてきた。

「えーと、それじゃ、乾杯」

「ふふ、乾杯」

二つの湯のみが、ガッツと鈍い音を立てた。

どこらへんがスクリユードライバーなのか必死に頭を回転させながら、和也はふーふー吹きながら熱い番茶をすする。

数分の思考の結果、和也は注文がうまく伝わらなかったという可能性に辿り着いた。

今度ははつきりと、分かりやすい注文を心がけよう。和也は片手を上げて指をスナップした。

「マスター！ マティーニを！」

全身細かく振動しているバーテンダーが、その仙人のような顔を

こちらに向けた。

和也が見守る中、バーテンダーは油の切れた Mobil スーツのような動きで、シェイカーの中にドライジンとベルモットとビールを注いだ。

「……え？ あの、マス」

「静かに、ね？」

女性が少々混乱している和也の口に人差し指を当てていた。

「あ、あの、でも、マティーニはシェイカー使わな」

「ここで生き残るには今までの固定概念を捨てないとダメよ」

「え？ 死ぬの？」

二人の会話を他所に、バーテンダーはシェイカーを掴むと、時々引つかかる餅つきのような動きでシェイクし始めた。

なぜか真剣な表情の女性と、呆然としたまま眺める和也が見守る中、バーテンダーの手からシェイカーがスポンと飛んでいつてどこかに落ちた。

「……あの」

「黙って見てて。これからが彼の真骨頂よ」

女性の言葉に和也が視線を元に戻すと、バーテンダーがシェイカーを飛ばす前と寸分変わらぬ動きをしていた。

「……え？」

「これが奥義、エア・シェイクよ……」

「エア・シェイク……」

よく意味が分からないまま、呟いてしまふ和也。

カウンターの向こうでは、バーテンダーの妙に機械的な動きが続いていた。そして長く白いまゆ毛の下の目がきらりと輝くと、バーテンダーはひたりと動きを止めた。

「エア・マティーニの完成よ」

「……それ完成してないんじゃない？」

しばらく電池が切れたかのように止まっていたバーテンダーは、くるりと後ろを振り返ると何歩か歩いてしゃがみこんだ。立ち上が

ったバーテンダーの手には、さつき飛ばしたシェイカーが握られている。

「信じられない」

女性が目を見開いてバーテンダーを見ていた。

「あのー、何が？」

和也の遠慮がちな問いに、女性は頬を紅潮させながら口を開いた。

「シェイカー飛ばした事に気付くなんて……」

「……え？」

状況を理解できない和也にかまう事無く、バーテンダーはシェイカーをあけると中身を紙コップに注ぐ。細かい震えが邪魔してほとんどこぼれたのでビールが代りに紙コップを満たした。

バーテンダーの手が紙コップと白菜の浅漬けが載った皿を和也の方へ差し出す。

「えーと」

和也がおつまみセットを前にいろいろ考えていると、その横で女性が席から立ち上がった。

「ふふふ、今日は滅多に見られないものが見られて楽しかったわ」

見上げる先で、頬をほんのり染めた女性は和也に向かって片目をつぶった。

「それじゃまたね」

そのまま女性はまっすぐ斜めに進み、ソファにぶつかって向こう側に頭から落ちた。

あわてて和也が助けると、鼻血を吹いた女性が笑顔で礼を言った。

「ふふふ、ありがとう」

「あの、酔ってるんですか？」

和也の言葉に女性は遠くを見るような眼をした。

「ふふ、お酒なんて……女が酔うのは雰囲気だけよ。ちゃんとあなたは二人いるし」

「いえ、一人ですが」

「やっぱり面白いわね、あなた」

女性は笑いながら見事な千鳥足で店を後にした。
ため息をついて席に戻った和也は、皿の上の白菜の浅漬けをつまんでぼりぼりと食べる。

浅漬けを食べるうちに、和也は無性にお茶を飲みたくなった。

「あの、すみません。お茶下さい」

バーテンダーは和也の言葉を聞くと、ビールの空き缶を磨いていた手を止めて冷蔵庫に向かった。

和也はのんびりとバーの雰囲気身をゆだねた。

「意味分かん」

呟いた和也の前にカクテルグラスが音も無く置かれた。

「……？」

和也はグラスとバーテンダーを交互に見た後、グラスに口をつけた。

「……マティーニだ」

しばらくグラスの中のマティーニを眺めた後、和也はまた呟く。

「意味分かん」

ため息をついた和也が、マティーニの中のオリーブを齧ったら小梅だった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5438c/>

BAR「憩い」

2009年3月24日10時45分発行